

## はじめに

環境総合研究所は、公害研究所（1971年設置）・公害監視センター（1972）・環境技術情報センター（2008）の3つの事業所を再編・統合し、大気汚染の常時監視や公害対策、環境汚染の未然防止に係る調査・分析・研究活動に加え、本市の優れた環境技術による国際貢献の推進、都市と産業の共生をめざした研究、パッケージ化した情報の発信、環境人材育成を総合的に行う新たな研究所として、2013年2月1日開設しました。これは、多様化・複雑化・グローバル化する環境問題に的確に対応していくため、環境分野の広範な領域に関して総合的な調査・研究を充実させていく必要があることから、国連環境計画（UNEP）、国立環境研究所、地球環境戦略研究機関（IGES）などの外部機関、優れた環境技術を有する市内企業等と連携の下、環境に関する総合的な研究を行う拠点として、殿町国際戦略拠点キングスカイフロントに整備したものです。

キングスカイフロント' KING SKYFRONT' のKINGは、Kawasaki INovation Gatewayの頭文字と地名の殿町に由来し、スカイフロントは多摩川を挟んで羽田空港の正面にあることから、ライフサイエンス・環境分野における世界水準の研究開発と新産業の創出の国際戦略拠点を形成していくという意味が込められています。戦略拠点の先導のため市が購入した約7000㎡の土地の上に、市財政における初期投資を低減するPPP方式で民間事業者が4階建ての民間ビル「川崎生命科学・環境研究センター（LiSE: Life Science & Environment research center ライズと読む）」を建設し、環境総合研究所はこの3階（約2400㎡）に入居しています。他のフロアでは、1階にはホール、理化学実験のできるセミナー室、環境アーカイブ、川崎市海外ビジネス支援センター（KOBS 経済労働局）、障がい者就労支援施設のカフェが、2階には衛生研究所を高度化した健康安全研究所（健康福祉局）が入居し、4階はレンタルラボとなっています。

本市は臨海部全域がエコタウンに、市全域が次世代エネルギーパークに指定されており、環境・エネルギーのショーケースとなっているため、LiSEのPPP事業者募集においても環境・エネルギー性能を高く求めました。太陽光・太陽熱・地中熱といった再生可能エネルギー、人感センサー・断熱・BEMSなどの省エネルギー技術の導入など環境に配慮した設計となり、川崎市建築物環境配慮制度（CASBEE 川崎）Sランクの評価です。また、研究者と研究成果を守る免震構造であり、外観は「知の引き出し（葉箱）」「試験管」をイメージしたデザインとなっており、多摩川・羽田空港を望む吹き抜け空間は研究者のリフレッシュ及びコミュニケーションスペースとなっており、公共交通の不便はあるものの、研究所にふさわしい空間を形成しています。

環境総合研究所の設立にあたっては、長い年月がかか

っています。公害研究所の老朽化による建替問題から発しましたが、単なる建替でなく新時代にふさわしい機能を先行的に整備し試行するというで2008年環境技術情報センターを川崎市産業振興会館内に設置しました。こうした試行と有識者会議の提言をもとに、次の5つの機能を設定しました。

- 1 川崎の優れた環境技術による国際貢献の推進
- 2 川崎の優れた環境技術情報の収集・発信
- 3 「都市と産業の共生」を目指した研究
- 4 さらなる環境改善と環境汚染の未然防止のための監視・調査・研究
- 5 多様な主体と連携した環境教育・学習

組織上の特徴としては、従前の公害研究所が環境対策部の、公害監視センターが環境対策部環境対策課のもとにあったのに対し、環境総合研究所は環境局のもととなりました。課の設置にあたっては、大気、水質といった従来の担当分けでなく、市民への説明責任を果たし、より広い視野で研究企画が立てられるよう、事業推進課、都市環境課、環境リスク調査課、地域環境・公害監視課の4課体制で発足しました。他都市の研究所から研究員と事務員の構成を尋ねられて困るのですが、当所は事務職員も上記5つの機能のいずれかの担当も分担しており、全員参加の研究所です。5つの機能と4つの課は、縦糸と横糸の関係であり、また本務を持ちつつも広がりを持ってクロスオーバーしながら進んでいくことが期待されます。

歩き始めたばかりの環境総合研究所ですが、このたび年報創刊号を発行することになりました。本年報を御高覧いただき、御意見御指導を賜れば幸いです。さらに、当研究所につきまして、今後とも御指導御鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

2013年12月



川崎市環境総合研究所  
担当理事・所長 牧 葉子